立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０２０年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学研究科　教育学専攻		
研究代表者（2021年3月現在のものを記入）	在籍課程・学年・学生番号	氏　名	
	□博士前期課程　年 ☑博士後期課程　１年 （学生番号：20pf003b　）	平井大輝　印	
指導教員	所属部局・職	氏　名	
	文学部・教授	秋葉昌樹　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題	小学一年次学級をまとめあげる教師の技法の相互行為論的探求		
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2021年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏　名	
	文学研究科・教育学専攻・博士課程後期課程・１年	平井大輝	
研究期間	２０２０　年度		
研究経費（1円単位）	（支出金額）　200,000円　／（採択金額）　200,000円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、学校生活の新参者である小学一年生を、学級の成員としてまとめあげる教師の技法と、学級概念のありようを相互行為分析の視角から明らかにしていくものである。特に、教科外の活動に焦点を当て、学級における「みんな」という規範がどのように構成され、運用されているのかということを明らかにする。以上のことを探求することで「小一プロブレム」をめぐる議論に対して、学校現場に還元することができる知見を提示していく。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　学級　〕〔　小学一年生　〕〔　相互行為　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

1. 研究の背景

今日社会問題化しているように、小学一年生が学級にうまく適応できないことは、「小一プロブレム」や「学級崩壊」として議論がなされている。こうした問題は多くの場合、就学前教育の場である幼稚園や保育園、そして家庭との接続関係に起因して生じるとされている。その解決策として、なめらかな接続をするために、カリキュラムの編成のあり方、園児や児童、保育者や教師の交流の機会を持つこと、個々の児童に対応した対策などが議論されており、学級をまとめあげる教師の役割は今日ますます重要になってきている。

だが、「小一プロブレム」をめぐる議論においては、主に学校生活との接続関係に焦点が当てられており、学校生活の新参者である小学一年生を教師がどのように学級の成員としてまとめあげているのかという過程が看過されている。また、教室における教師―児童間の相互行為に焦点を当てた研究はこれまでにもなされてきたが、そこでの焦点は教授過程に向けられており、日本の学級経営・集団づくりにおいて重視されてきた教科外の活動は十分に検討されてきていない。

2. 研究方法・研究内容

以上の問題点を解決するために、学校生活に馴染むことが重要な課題とされている小学一年生を対象とし、教授過程のみならず教科外の活動も含めて、教室で「実際に行われている」教師―児童間の相互行為を分析した。また、日本の学級経営論/集団づくり論において重視されてきた、教科外の活動における集団づくりを論じる際の特徴・問題点を明らかにすることで、相互行為に着目する本研究の意義を明確にした。主な研究内容は以下に示した通りである。

- 教室における教師―児童間の相互行為を分析する本研究では、教室において参与観察をすることが求められる。2020 年度においても調査を行う予定であったが、新型コロナウイルスの影響もあり、調査を行うことができなかった。そのため、これまでに収集した小学一年生の教室における相互行為場面の映像データをもとに分析を行なった。
- 教師が児童に対して、「みんなで決めたこと」として学級における活動方針に言及することが教室において頻繁になされていることに着目し、教師はいかにして「みんなで決めた」と言いうる状況を構成しているのかを明らかにした。そして教師や特定の児童が決めたこととしてではなく、「みんなで決めた」ことにするのは学級においてどのような意味を持つ実践であるのかを考察した。
- 学級経営論/集団づくり論の中でも、全国生活指導研究協議会における児童生徒の自発的な活動を尊重する議論に着目し、教師による管理・統制と自発的・自治的という概念がどのような関係のもとに論じられており、その問題点はどこにあるのかを明らかにした。

3．分析知見

①学級における活動方針を「みんなで決めた」ことにする教師の技法

入学して間もない時期の教師―児童間の相互行為に着目し、学級における活動方針を決める際に、教師がいかに児童の意見を取り入れ、「みんなで決めた」ことにしているのかを明らかにした。

教師は学級における活動方針を決める際には、一貫して「提案者」として振る舞うことで、教師が意見を述べることを一連の相互行為の過程において避けている。そして、教師の「提案」に対して、個々の児童が応答することを可能にすることで、少なくともすべての児童が意見を述べることが可能となる場を与えている。教師は児童の意見の全てに応じるのではなく、教師の「提案」に対して否定的な意見を述べている児童の発話を選択的に取り上げ、学級において他の児童と協働することで乗り越えることができるものとして位置づけ、児童を説得していた。最終的に多くの児童の賛同を得た上で、再度学級において協働して活動に取り組むことの意義を伝えた上で、「みんなで決めた」こととして学級における活動方針を決定しているのである。

本研究で明らかにした、学級における活動方針を「みんなで決めた」ことにする教師の技法は、必ずしも全ての児童の意見を引き受けているわけではないため、合意形成とは異なる水準にある実践である。それは、教師の巧みな振る舞いによって「みんなで決めた」ことにしてしまう実践でもあるという意味で、教師の提

研究成果の概要（つづき）

案に賛同できない児童を排除する可能性を持つものでもある。だが、学級における活動方針を「みんなで決めた」ことにすることで、児童を主体的に学級の活動に参画させる契機とすることは、新参者である小学一年生を学級に適応させていくことを可能とする実践として位置づけることができるものである。

②よそ者としての教師の振る舞い

教師が児童を指導する際に、「みんなで決めたことは守りましょう」といったように、学級における「みんな」のよそ者のように振る舞うことがあることに着目し、よそ者論を分析枠組みとして、そうした教師の振る舞いが集団を統制していく上でどのような意義があるのかを考察した。そこでは、教師がよそ者のように振る舞うことには次のことを可能とするためであった。それは、教師がよそ者のように振る舞うことで、児童が自明視している「みんな」の境界を明示するとともに、児童が自明視している「みんな」のあり方を問い直させることを可能とするものであった。

小学一年生の学級において、学級の活動方針を「みんなで決めた」ことにすることの意義は、児童を学級における活動に適応させていくためであり、またうまく適応できない児童を包摂していくためのものなのである。

①と②の成果は以下の形で報告した。

業績１：平井大輝、「学級の秩序化実践と周縁的存在としての教師」（II －５部会　児童と生徒の相互行為）日本教育社会学会　第７２回大会発表　オンライン大会、2020 年９月５日.

③ 二項対立図式のもとで教師の管理と児童生徒の自発的な活動を捉えることの問題点

全国生活指導研究協議会の学級集団づくり論における両概念の結びつきに着目し、「適切な指導」という概念を介在させることにより、教師による管理・統制的な側面が乗り越えられるものとして位置づけられていることを明らかにした。「適切な指導」という概念は、渋谷（2015）が「小学校学習指導要領解説」を事例に論じているように、学級集団づくり論に限らず、学級経営論/集団づくり論において自発的・自治的な活動を論じる際に用いられている概念である。

だが、指導の適切性に関する判断は、指導している教師が行うべきものとされており、自発的・自治的な活動は教師に都合よく解釈された実践にすぎないという批判を招く議論となっているという問題点がある。また、教師による指導の適切さも論者によって多様であるため、異なる適切な指導の論理からの批判を招く議論となってしまっている。

今後の課題としては、管理・統制と自発的・自治的の両概念の関係のみならず、「適切な指導」の位置づけを整理することを通じて、児童生徒の自発的・自治的な活動を論じていく際の限界と可能性を探求していくこと、そして、教師が適切と位置づける実践が実際にどのように行われているのかということを相互行為から明らかにしていくことである。

③の成果は以下の形で報告した。

業績２：平井大輝、「『自発的・自治的』の矛盾―学級経営論/集団づくり論における『管理・統制』の行方―」『立教大学大学院教育学研究集録』第 18 号、pp. 69-76.

※この（様式２）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。

研究発表（研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。）

① 雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
② 図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③ シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①
平井大輝、「『自発的・自治的』の矛盾―学級経営論/集団づくり論における『管理・統制』の行方―」『立教大学大学院教育学研究集録』第 18 号、2021 年、pp. 69-76.

④
平井大輝、「学級の秩序化実践と周縁的存在としての教師」（II －５部会　児童と生徒の相互行為）日本教育社会学会　第７２回大会発表　オンライン大会、2020 年 9 月 5 日